
テディ・ベアの秘密

浅葉りな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

テディ・ベアの秘密

【Nコード】

N3552C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

17歳の誕生日、幼馴染の高雄にもらった大きなテディ・ベア。男子高校生にテディ・ベアって。と、内心ツツコミを入れた優人だったが、その気持ちそのものは嬉しくてたまらない。だが、恥ずかしい思いをしながら持ち帰ったテディ・ベアには、秘密があったのだ。ヒミツシリーズ1作目。

「これ、やる。優人に似合うだろ」

そう言っつて幼馴染みの高雄がくれた、大きなテディ・ベア。

一抱えもあるそれを見たとき、オレはなんの冗談だ、と思った。

オレはもう高2だ。しかも男だ。テディ・ベアを喜ぶようなガラじゃない。

たしかに女の子みたいだとか、中学生に見えるとか、さんざん言われるのは認めるけど……。

高雄にまでそう思われてたのは正直、ショックだった。

でも誕生日を律儀に覚えててくれたことが嬉しくて、わざわざ買っつてきてくれたことが嬉しくて、オレは恥ずかしい思いをしながらテディ・ベアを持ち帰ったのだった。

やっぱり、男の部屋にはテディ・ベアは似合わない。ベッドに置いたテディ・ベアを見つめながら思う。

「……やっぱ、しまっところかな」

口に出してから、ぶんぶん首を振る。

いや、そんなことはできない。

だってこれは高雄が、オレにくれたものだ。

多少似合わなかつたとなんだろうと、好きな相手からもらったものはなんだって嬉しいし、いつも見えるところに飾っておきたい。

そう、オレは高雄に恋をしている。

ずつとなにをするにも一緒だった幼馴染み、しかも男に恋をするなんて！ と自分でも思う。

でも仕方ない。だってオレは高雄が好きなんだ。

オレは目を閉じて、テディ・ベアをぎゅっと抱きしめた。

「おまえが高雄だったらいいのに」

くだらない仮定。なんて健気なオレ、なんて思いながら、テディ・ベアの鼻先にキスをする。毛が口の中に入って変な感じがした。

「好きだよ、高雄」

今まで一度もプレゼントなんかくれたことがなかったおまえが、こうしてテディ・ベアをくれたっただけで、オレの想いはあふれ出しそう。いつそう腕に力をこめる。

「好きだ。好きなんだ。オレだけのものになってよ、高尾」

言葉があふれてくる。

閉じたまぶたの裏に高雄が浮かぶ。

高雄はオレと違って頭がいい。ばりばり理系って感じの、めがねがよく似合ういい男だ。白衣を着るととんでもなくサマになる。

機械いじりが趣味なんていうちょっと暗そうな趣味でさえ、高雄の趣味だと聞くと納得がいく。それくらい高雄はかつこいい。

だから高雄はクラスの女の子にもモテる。オレも何度かラブレターの配達人をやらされた。そんな高雄だから、オレには望みなんてカケラもないのだ。

「……でも言えるわけないよなあ……」

もしも言ったら、幼馴染みって地位まで失うハメになるだろう。

オレはため息をついた。

高雄への愛しさはあふれそうだったというのに、オレはそれを本人に伝えることさえできない。せいぜいが、高雄の身代わりにテディ・ベアに向かつて告白する程度だ。

そのとき、携帯の電子音が鳴り響いた。

ディスプレイには高雄、と表示が出る。

「もしもし？」

いぶかしく思いながら携帯に出た。

「ああ、優人」

携帯電話越しに聞こえてくる、抑揚に乏しい高雄の声。それだけで頭がくらくらする。

「実は今から懺悔がしたい。聞いてくれないか懺悔？」

「なんだろう。そう思いながらうなずいてから、電話越しだったことを思い出していいよ、と言った。」

「今から言うことを聞いても、決して怒らないし軽蔑もしないと約束して欲しい」

「聞く前から約束なんかできないって」

「いいから、約束して欲しい」

「言い募る高雄の迫力に圧されてしまう。結局、いいよと答えるほかなかった。」

「実は今日プレゼントしたテディ・ベアには仕掛けがしてある」

「……へえ。しゃべるとか？」

「そんなくだらないことはしない」

「じゃあ、なんだよ」

「盗聴器が仕掛けてある」

「ああ、盗聴器ね、そりゃすごい……って盗聴器!？」

「思わず声が裏返った。」

「盗聴器って……つまり、あの、音声を盗み聞きする道具だよな？」

「それってことは、つまり」

「もうわかってると思うが、おまえのセリフは全部聞かせてもらった」

「宣告された瞬間、顔が真っ赤になったのがわかった。」

「どうしてそんなことしたんだよ！ 試作品の性能を試したかったんだとしたら最低だ！」

「性能実験なら充分やってある。それは成功した第1号だ。軽量化・小型化を行って、ターゲットにより気づかれにくくすることに成功した」

「オレが聞きたいのはそんなことじゃない。どうしてそんなことしたんだ、って聞いてるんだ」

「……おまえのことをすべて把握していたかった」

「は？」

まるでストーリーカーのセリフだ。

高雄じゃない人間が言ったんだとしたら、間違いなく殴っているところだ。高雄が言ったにしたって、こんなに腹が立つんだから！

「愛している。優人」

「ああオレもだよ……ってええっ!？」

さっきから声を裏返してばかりいる。なんだか微妙に情けない。

「えっとそれはつまり……おまえもオレを好き、ってこと？」

「ああそうだ。できれば交際を申し込みたいと思っている」

交際、だつて。なんて古臭い……いやそんなことはどうでもいい。今つまりオレは高雄に愛の告白をされてるわけで、つきあってくれといわれてるわけで！

「返事は？」

「待つてる。すぐ行く」

宣言してオレは電話を切った。

こんな大事なこと、電話越しになんか言えるもんか。

顔を見ていわなかったら感動も半減だ。

オレは脱いだばかりのコートをまた着込んで、部屋を飛び出した。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3552c/>

テディ・ベアの秘密

2009年3月24日10時08分発行